

須藤五百三

—魯迅最後の主治医—

泉 彪之助

中国の文豪魯迅の最後の主治医須藤五百三について、演者がその生涯を明らかにし、先に論文として発表した(『福井県立短期大学研究紀要』第一〇号)。

しかし本学会ではまだ報告していなかったので、須藤の故郷岡山県で本学会が開催される機会に、論文発表後に行った現地調査の結果を含めて報告し、批判を仰ぎたい。

須藤五百三は明治九年六月十八日岡山県下原村(現川上郡成羽町下原)に出生、地元で初等教育を受けた後、第三高等中学校医学部(現岡山大学医学部の前身)に入学し、明治三十年同校を卒業した。その後陸軍の軍医となり、北清事変にも従軍、日韓併合後は現役軍医の身分のまま朝鮮へ派遣され、明治四十五年六月から総督府立黄海道慈恵医院の院長として勤務した。

大正七年須藤五百三は二等軍医正の地位で陸軍を退官し、弟祐七が貿易商を営んでいた上海に行き、そこで開業した。魯迅を診察した頃は、須藤医院は上海市虹口区密勒(ミナ)路一〇八号にあったが、最初からこの位置であったかは明らかでない。この場所は、一昨年報告した坪井芳治医師が勤務した篠崎医院からは二ブロックほど離れている。一九八六年現在、須藤医院の建物は住宅になっている。

魯迅は、一九二七年広州から上海に来、死去に至るまで九年間上海に住んだ。上海在住の機会に許広平夫人と結婚し、一九二九年令息周海嬰が生まれたため、医療を要する機会は多くなった。魯迅は、日本人居住者の多い虹口区に住み、以前日本で医学を学んだためもあって日本人医師を主治医とした。須藤医師に受診するようになってからは他の医師にはかからず、一家の健康を須藤医師に委ねた形になった。

一九三六年初頭から魯迅は持病の肺結核が悪化し、須藤医師の治療を受けていたが、経過が思わしくなかったため、周囲の人々のすすめでアメリカ人医師トーマス・B・

ダンの診察を受けたことはすでに報告した通りである。しかし魯迅はダン医師の診察を希望せず、死去に至るまで須藤医師の治療を受けた。

一九三六年十月十八日午前三時頃、魯迅は自然気胸を併発し、呼吸困難を来たし、強心剤の投与、酸素吸入などの手当を受けたが効果がなく、翌十九日早朝魯迅は死去した。魯迅の絶筆は、内山書店主内山完造にあてて、喘息様症状が起ったため須藤医師への連絡を依頼したものである。

魯迅の死去後須藤五百三は、魯迅の病状についての文章を新聞『上海日報』（日本語）および中国誌『作家』（中国語）に発表し、後者は魯迅逝去一年後に公刊された『魯迅先生紀念集』に再掲された。『作家』の文章は、『上海日報』の文章の翻訳かと思われるが、現在『上海日報』の該当号を見ることができず、正確には不明である。

その後も須藤五百三は上海で診療を続けて、戦後、昭和二十一年に日本に引き揚げた。故郷成羽町の生家で開業して町民の信頼を集めたが、昭和三十四年十一月六日八十三歳の高齢で死去、同町龍泉寺に葬られた。

須藤五百三の夫人は花枝という名で、二人の間には長男武一郎が生まれた。武一郎は早稲田大学卒業後フランスに留学した文章家で、『魯迅日記』には、武一郎が上海を訪れた際に魯迅を見舞った記事がある。

魯迅は作品『死』の中で須藤五百三について、「呼吸器病の専門家ではないけれども、医学を学んだ先輩であり、気がおけない」と述べている。

須藤医師から診療を受けた人々はすべて、須藤医師を高く評価しているが、このような信頼は魯迅がもったそれと共通のものであり、須藤五百三が優れた医師であったことを意味していると思われる。

（福井県立短期大学第一看護学科）